安酸敏眞先生のご報告
「現在（いま）、あらためて《人文学》を問う」に寄せて

貝澤　哉

Toward a Methodology for the Human Sciences:
Some Comments on Prof. Yasukata's Report “Making a New Inquiry into "Humanities"”

Hajime KAIZAWA

安酸敏眞先生のご報告「現在（いま）、あらためて《人文学》を問う」を、たいへん興味深く拝読させていただき、多くの点で刺激を受けました。以下に、このご報告に触発されて考えたことを大雑把に述べたいと思います。

安酸先生は、「人文科学」と「人文学」を概念的に区別されたうえで、「人文学」をたんなる「スキエンティア（サイエンス）」ではない「人間形成」に資する学知（「ラーニング」）ととらえられ、さらにその特徴を、専門化し細分化する「サイエンス」との対置において、「統合的」な原理と規定しておられます。ただし、紙数（あるいは報告時間）の関係もあって、こうした《人間形成に資するラーニングとしての学知》や、それを可能にする《統合的な原理》とは具体的にどのようなものであるのか、いったいいかなる根拠をもって「人文学」をそうした学知と規定できるのか、またなぜそれが今私たちにとって重要かつ必須なのか、といった点について、理論的に詳細にご説明されているわけではありません。

しかしもちろん、ご報告のなかで触れられているいくつかのモチーフにかんして、私たち読者（聴者）の側で、そこに上記の問いの解明にかかわる何ものかを自発的に読み解く可能性は充分に開かれているように思います。その意味で私が注目するのは、安酸先生が引用しておられる文献学者アウグスト・ベークによる、文献学は「認識されたものの認識」であるというテーゼと、カッシーラーによる、人間は「シンボルを操るもの」であるというテーゼです。ここからは、安酸先生のご報告に触発された私の感想になります。

私自身としてはまず、人文学というものが「サイエンス」とは異なる学知として可能かつ必要である根拠を原理的に考えてみたいのですが、そのとき重要な鍵となるのが「認識されたものの認識」というベークのテーゼであるように思われます。一般に文化や歴史、芸術の研究など、人間がその文化活動によって生み出した生産物を対象とする人文科学（この意味では社会科学も、人間が社会的に生み出したものの研究である限りは、じつは原理的には同じなのですが）は、新カント派やディルタイも強調していたように、客観的自然物を対象としてそれを直接的に観察・記録する自然科学的な知とは根源的に異なって、過去の人間が残した遺物、文献、作品、社会的文化的制度等を対象としており、基本的にナマの自然的所与ではなく、他の人間主体が過去にすでにおこなった認識・表現活動を、その痕跡として残された文化的生産物を介して間接的に再び認識し、それをあらたに表現（たとえば論文を書くなど）しようとする活動なのであって、その意味でまさにベークが主張するように、すでに「認識されたもの」をあらたに「認識」しなおす、という入れ子構造のような自己再帰的な活動にほかなりません。

注目すべきなのは、こうした人文的な知の特性がいくつかの非常に重大な帰結をもたらすということです。

その第一の点は、人文的な知においては、自然科学的な知のモデルとは異なり、ナマの対象自体を直接的に観察することはできない、ということです。「認識されたものの認識」という場合、そのもとの「認識」はつねに、文献や作品などメディア化された痕跡を介して間接的にしか与えられません。私の専門である文学研究でもそうですが、私たちは、過去の作家の認識を脳波や心理実験等で直接即物的に観察するのではなく、作家がそれを表現したものとして残された作品（そしてそれは言語や書物というメディアを支持体とすることで伝承されるのですが）を媒介として、間接的に推量し予測することしかできません。私たちはときに、数百年あるいは数千年前の文献を読み、その表現を読解するという作業を当たり前のように行っています。しかし、その場合私たちは、過去の人間たちがさまざまな媒体（メディア）を通して表現し残してきた認識の痕跡を、あくまで間接的に読み解くことしかできず、そのため、自然科学的な意味での客観的な真実や普遍的法則への到達は、最初から不可能なのです。

私の専門分野では、たとえば 20 世紀初頭のロシアの哲学者グスタフ・シペートが、この問題を真正面から取り上げています。彼は 1918 年に執筆した「解釈学とその諸問題」という大部の草稿のなかでシュライアーマッハーの解釈学を取りあげながら、「解釈」あるいは「理解」とはじつは、そのもとにある対象がどうしても知りえないものだからこそ、間接的な資料（言葉、記号）の「解釈」による「理解」をする必要が生じるのだと力説しています。実際彼は、アウグスト・ベークの「私たちはプラトンのように哲学する必要はないが、プラトンの作品を理解する必要がある」という言葉を引くことで、プラトンその人の主観や心理自体の直接的・即物的再現と、私たち他者によるプラトンのテクストの読解による「理解」とが、まったくちがう事態であることに注意を促しているのです。

ここで重要なのは、シペートがこうした「解釈」と「理解」の問題を、狭義の解釈学や文献学だけでなく、広く哲学や人間的知全体の基礎に置こうとしていることです。上に述べたように、もともと人間的な活動の産物を対象とする知は、いずれも何らかのメディアにおいて表現された痕跡を媒介として、表現主体である他者の認識を間接的に再び理解し認識しなおそうとするものである以上、いずれも「解釈」による「理解」という読解の技術を必要とする間接的な知であり、過去の他者たちの単独・個別的でかけがえのない存在（人格的なその統一）や、その歴史的不可逆性、一回性を対象とし、個別な存在者の個別的意味そのものを救いあげるものであって、どこの時代の誰にでも当てはまる普遍的法則を直接的に観察し導き出せると考える自然科学的な知とは原理的に異なっているのです。

ここから、人文的知の独自性の一端が明らかになると考えられます。つまり、人文的知ではまず、つねに何らかのメディア化された痕跡の読解技術（たとえば言語的なテクストの読解力）が必要であり、そのメディアがどのようなものであれ、それは根本的には変わらないということです。デジタルメディアであろうと、この原理的な問題は変わりません。したがって私たちは、やはりデジタル資料を「他者の認識の認識」として間接的に読解する技術を訓練する必要があるわけです。もちろんメディアの技術的基盤の変化に伴って、読解技術のあり方そのものは当然変化していくのでしょうが。

さらに、上で明らかになったのは、人文的な知がつねに、過去の他者の単独・個別的でかけがえのない存在（人格）の歴史的（または出来事的）な一回性とかかわるということです。シペートは、まさにこの点を強調するために、文献学とは「認識されたものの認識」であるというアウグスト・ベークのテーゼを引用し、人文的知は基本的に、他者が過去にすでに認識・表現したものをさらに「解釈」、「理解」し表現する（論文や発言、原稿などで発表する）という点で、原理的に対話的なものであることを示唆しています。

このことから、私が強調したい人文的な知の特性がもたらす非常に重大な帰結の第二の点が導き出されます。人文的な知が、ベークやシペートが言うように「認識されたものの認識」なのだとすると、それは原理的に対話的なものであり、しかも対話的である以上は、「ある表現を読解・理解する」という一回のサイクルのみで完結することはありません。たとえば文学や文献学などの研究では、他者の過去の発言（言語的テクスト）を読み、それについての自分の発言（言語的テクスト）をつくりあげていくわけです。しかし、他者の言葉の読解をとおして織りあげられた自分の言葉もまた、他の誰かによって読まれ、解釈・理解され、その誰かの言葉を形成し

ていくわけであり、それもまた他の誰かに読まれていきます。またその発端となった最初のテクストも当然、無から創造されたわけではなく、先行するテクスト、つまりそれより前の他者たちの言葉（テクスト）の解釈・理解を経てつくられたものと考えるべきでしょう。実際私たちは、日々の研究活動において、対象のテクストについて書かれた別のテクスト（二次文献）を読解・再解釈するという作業を当たり前のようにおこなっています。

このことは、シペートとほぼ同世代のロシアの美学者ミハイル・バフチンによっても強調されているところです。「人文科学の方法論によせて」というノートのなかで、彼はおそらくディルタイなどをヒントに、事実的でニュートラルなデータの普遍的確認としての「認知」と、個別的・一回的で人格的・主体的な価値づけに彩られた意味の唯一無二の読解としての「理解」とを区別したうえで、あらゆる人文的な知の根底にあるのは、言葉や表現を、事実の「認知」ではなく、価値や意味を「理解」するための基盤となる、人格的な存在者同士のこうした開かれた対話的関係の連鎖としてとらえることだと主張しています。こういう関係のなかでは、当然ある言葉を解釈した言葉もまた、別の言葉によってさらに解釈されるという対話の連鎖に置かれることになり、元のテクストの著者の人格的存在者としての一回性・歴史性だけではなく、それを読解する私たち自身の歴史的存在者としての一回性（その意味・価値）もまた問われることにならざるをえません。

しかしまた、逆に言えば、歴史的存在者としての私たちの時間的・空間的な限定性（「今・ここ」に囚われてあることの有限性や貧しさ）、そしてそれに起因する意味・価値的な未決定性は、過去のテクストとの対話的関係や、未来に書かれるはずのテクストとの（可能的な）対話的関係のなかで「読解」し「理解」しあうことで、意味・価値を相互的に読み込み付与しあって、お互いに一回的・歴史的な人格的存在者としての価値や意味の豊かな輪郭を獲得することができる、とも言えます。

ちなみに、ここで「人格的」というのは、けっして道徳的・倫理的あるいは人道主義的な意味での人間中心主義や、「人柄」「個性」「性格」などを指すのではありません。バフチンにとって「人格」とは、身体を持って存在する有限の存在者（人間）の存在構造を意味しており、意識の内側から内的に感覚する自分の内的身体と、他者が外在的視野からその人の外的なあり方を視野や言葉などで補ってくれる外的身体という二つの契機によってつくられる統一した主体の存在構造のことです。つまりバフチンは、人間の「私」の人格自体が、つねに他者の視線や言葉（つまり「理解」）を含み込んではじめて成立するものだと考えているのです。またこの点ではシペートも類似の議論を展開しており、彼によれば「個人」や「私」自体が、社会的交流のなかで言葉や記号を介して表現されることで、（他者に）解釈・理解される「意味」として立ち上がってくるものなのです。

ここまで考えてくると、冒頭に提示したいくつかの問いについて、大雑把ではありますが、私なりにある種の答えを導き出すことができるのではないかと思われます。私が冒頭で提示した問いは、《人間形成に資するラーニングとしての学知》や、それを可能にする《統合的な原理》とは具体的にどのようなものであるのか、いったいいかなる根拠をもって「人文学」をそうした学知と規定できるのか、またなぜそれが今私たちにとって重要かつ必須なのか、ということでした。

まず、「人文学」が「人間形成に資するラーニングとしての学知」であるのは、人文的知の基礎にあるこの「対話性」の連鎖に終わりがないため、私たちはたんにテクストの著者の認識や人格を自分と無関係なものとしてニュートラルに観察したり解剖したりしていれば済むのではなく、それを読解している私たち自身の歴史的・一回的な人格的価値や意味そのものもまた同時に問われることになるからです。しかも人文的な知においては、この対話性に終わりがないため、意味や価値が最終決定されることはありえません、ある「理解」や「解釈」、「読解」は不断に新たな吟味にさらされ、その都度新たな学びが読む側である私たちにも課されてきて、終わることがないのです。この意味で、人文的な知は、読む側にも人格的な価値や意味の終わりなき形成を要求する不断の学びと言えるでしょう。

しかもこのことは、人文的な知がバラバラで偶然な自然物や知識の集合なのではなく、表現し読解する主体たちのあいだで交わされる人格的な価値や意味に彩られた対話であることを含意しているので、これが分析的な知ではなく綜合的な知であり、「理解」をとおした意味や価値へのある種の統合を目指

していることはあきらかです。もちろんそれが対話的な連鎖である以上、この統合はけっして一元的で一方通行的な体系化ではなく、多様な言葉や声による、意味や価値をめぐる理解の相互応酬という形態をとるわけですが。

こうしてみれば、つぎの問い――いったいいかなる根拠をもって「人文学」をそうした学知と規定できるのか――の答えも明らかです。基本的に人文的な知の作業は、過去の人間によって思考され表現されたものを間接的な痕跡を介して読み解くことしかできず、その意味で原理的に「認識の認識」、「読みの読み」、「理解の理解」という特殊な、いわばトートロジー的あるいは自己再帰的な形態をつねにとらざるをえません。だからこそ人文的な知の習得は終わりがない（最終的回答がない）ものとなり、その統合性もまた、即物的で出来合いの物や法則としてではなく、私たちにとっては、テクストの向こう側に隠されていて、テクストの「解釈」や「理解」という間接的な方法を通して不断に読解しなければならない、一回的・歴史的で人格的な統一としての意味や価値となって現れるわけです。

では、なぜそれが今私たちにとって重要かつ必須なのでしょうか。それはすでに述べたように、原理的に考えれば、人文的な知のこうした特徴は、基本的に人間が文化的・歴史的に形成してきたすべての領域に当てはまることだからです。歴史学や文献学、哲学、芸術研究などの、いわゆる狭義の人文諸科学だけでなく、人間の社会や経済、政治その他の活動を対象とする学知はすべて、言葉やその他のメディアを媒介として表現され、他の人間に読解されることで伝承されていくのであり、この意味で、自然的所与を直接観察し普遍的に法則化する自然科学的な学知のあり方とは根源的に異なっています。「認識の認識」というこの広義の人文的な知独自の原理的なあり方は、私たちの社会的・文化的な生のあり方を広範にかつ根源的に規定しているものにほかならないのであり、このことの重要性に無自覚なままでは、人文・社会のいかなる領域であれ、その対象の特質を的確にとらえて理解することはできないでしょう。

「認識の認識」としての人間の知的活動全般が原理的に持つこうした媒介性や間接性を、シペートは感性的媒体（「言葉」、「記号」）を介した社会的な「意味」の「表現」と「理解」の問題としてとらえようとしましたが、これを別の側面から考えれば、カッシーラーの言う「シンボル」の問題になるのだと思われます。人間の社会・文化的な活動はすべて「言葉」や「記号」その他の「シンボル」を媒体とした意味や価値の間接的表現と、その読解、理解のプロセスによって形成されているのであり、私たちの日常的な社会・文化的な生そのものの根源的なあり方を規定するこうした「シンボル」の表現と読解のプロセスは、人文的な知なしには解明することができません。この意味で、人文的な知は今日の私たちにも重要かつ必須なものなのであり、狭義の人文諸科学も当然ながら、こうしたより広い人文的な知の原理的問題を無視して、自然的所与を対象とする実証的あるいは功利的な科学の身振りを模倣するだけでは、人間によって生み出された文化的・社会的対象の本質に迫ることはけっしてできないと思われます。